



## ノルウェーの連続テロ事件

レグランド つかぐち 塚口 としこ 淑子

ノルディック出版・代表

アンデシュ・ベーリング・ブレイヴィク (Anders Behring Breivik)は32歳、金髪で青い目という、ごくふつうにみられるノルウェー人である。その一見ふつうの男性は、7月22日金曜日の午後、オスロの中心地にある政府庁舎に強力な爆弾を仕掛け、建物やその周りを大きく破壊した。爆発で建物の中にある首相の執務室に続く壁に穴が開くほど、狙いは正確であった。ブレイヴィクは首相の殺害をはじめ、政府の中核組織の機能破壊を図ったのである。首相は無事であったが、死傷者は多くでた。

つぎにブレイヴィクは、オスロから40キロの距離にある小島、ウトイヤ (Utøya) に車を向けた。この島では、ちょうどノルウェー労働党青年部主催の恒例のサマー・キャンプが開かれていて、外国からの参加者も含めて、多数の青年男女が集まってきていた。そこへ警官に扮したブレイヴィクが現れ、逃げまどう若者たちを、つぎつぎと射殺していった。

一連のテロ行為の被害は大きく、オスロ市内とウトイヤの両方で、死者は最終的に69人となった。しかし、それ以外にも重傷で入院中の人たちがいる。プロンドで青い目のノルウェー人が同胞を大量殺戮したのだ。何が彼をそのような不可解な行為に駆り立てたのか。

なぜノルウェー人が、ノルウェー人を？

思いがけない出来事に、早まったメディアの一

部は、アルカイダなどのイスラム系のテロだと報道したが、犯人 (正式には容疑者) が判明したときの人々のショックは大きかった。

一介のノルウェー人が綿密に大がかりなテロ計画をたて、それを冷酷に実行したのである。本人自身の言もあるし、現時点ではブレイヴィクの単独行動であるとされているが、これから時間をかけて背後関係を洗い出すと発表されている。それにしても驚くべきは、ブレイヴィクは襲撃の準備に9年もの月日をかけていることだ。手間ひまをかけて化学肥料から爆弾を作り上げたのも準備の一環だ。

ブレイヴィクを狂気の行為に駆り立てた理由は何かと、誰でも考えるだろう。それは、ノルウェーを単一人種国家であることを守るためである。多くの国粋主義者にみられるように、ブレイヴィクは、他のヨーロッパ諸国同様に、ノルウェーに大勢の外国人が移住してきて、多文化社会になるのを快く思っていない。彼ら移住民は子どもを沢山産み、いずれ西洋社会を乗っ取ると考えている。白人社会であるノルウェーをそのような危機に陥れたのは、戦後、長く政権の座にあるノルウェー労働党の政策だと彼は判断した。「国難」に休止符をうつために、首相を務める労働党党首を殺害し、次世代の政治の担い手となる労働党青年部員の根こそぎ排除を目指したわけだ。ブレイヴィクはテロを行う理由や、準備の過程を1500頁にわたるマニフェストとしてビデオ公表している。その



簡単な紹介はノルウェー放送のニュースで見られる (<http://www.nrk.no/nyheter/norge/1.7724894>)。

マニフェストには、勲章などがいっぱい付いている衣装を身につけた写真もあり、自分を白人社会ノルウェーを危機から救う英雄に仕立てあげる演出をしている。また、筋肉増強剤であるアナボリックステロイドを服用して自信をつけていた。

### 指導者としての首相の在り方

イェンス・ストルテンベリイ(Jens Stoltenberg)首相(52歳)は、前代未聞の出来事にすばやく反応し、事件発生直後からひんぱんにメディアに登場した。なかでも有名になったのは「邪悪はひとりの人間を殺すことはできるが、全国民を支配することはできない」というフレーズだ。また、「ノルウェーは多文化社会であり、これからも今まで以上に開かれた社会であり続ける」と事件直後に宣言している。アメリカで9・11事件が起こったあと、当時のブッシュ大統領が、外国人、とくにイスラム系の人たちにさまざまな規制政策をとったのと正反対であるのは興味深い。

自分も若い頃はウティヤのサマー・キャンプに参加しており、思い出深い場所であるうえ、意を同じくする有能な若者を多く失った悲しみは耐え難いものであるという個人的な感情を、涙をこらえて表現した。しかし同時に、怒りと憎悪に自分を失うことなく、一国の指導者として毅然とした態度で、国民全員が一体となって危機を乗り越え

るという指針を明確に示した。多くの国民はストルテンベリイ首相の態度に共感した。事件直後の世論調査によると80パーセントのノルウェー人は、彼の対処は適切であったと評価している。不適切としたのはわずか1パーセントだ。目下のところ、首相に対する信頼感は日をおって強くなっており、労働党への入党希望者が続出している。

### 地に堕ちた「最後の楽園」

ここスウェーデンでのショックも計りしれない。じつはノルウェーは北欧での「最後の楽園」であったからだ。自国はパルメ首相を1986年に暗殺されて以来、深いトラウマを抱える国になっている。デンマークは、外国人、とくにムスリム系アラブ人排斥が目に見えぬほどになり、さまざまな事件を誘発している(拙著「ムハンマド風刺画と北欧諸国」を参照されたい。<http://www.rochokyo.gr.jp/articles/ab0602.pdf>)。フィンランドでも「真のフィンランド人」という外国人排斥の政党が、今年春の国会選挙で3番目に大きい支持率を得たのが大きな汚点となった。戦後の北欧では、ノルウェーだけが大きな傷をもたない無垢な福祉国家という楽園であったのだ。「ブルータス、お前もか」ではないが、スウェーデンではいま、ノルウェーの不幸を我が事のように悲しんでいる。